実際の記憶と虚記憶における自己選択効果

再認テストを用いた検討 2

○川崎弥生¹・巖島行雄¹・山祐嗣²

(¹ 日本大学文理学部・² 大阪市立大学大学院文学研究科)

キーワード：虚記憶・自己選択効果・再認テスト

Self-choice effect on true memory and false memory with a recognition test 2

Yayoi KAWASAKI¹, Yukio ITSUKUSHIMA¹ and Hiroshi Yama²

(¹College of Humanities and Sciences, Nihon University, ²Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University.)

Key Words: false memory, self-choice effect, recognition test

目 的

実際に経験していないことを起こったこととして思い出し、実際に経験したことを事実とは大幅に異なるように思い出すことを虚記憶という(Roediger & McDermott, 1995)。この虚記憶を検討する方法に単語リストを用いたものがある。この方法では1つの単語(以下ルアー語)を強く連想する単語をリスト語として用いる。このリスト語を学習した後に、再生テストや再認テストを課すとルアー語が高い確率で誤って再生されたり、再認されることが示されている。現在、虚記憶を説明する理論は大きく分けて2つあり、実際の記憶と虚記憶が同質とする実験では活性化-モニタリング説(Roediger, McDermott, & Robinson, 1998)が支持され、異なるとする実験ではファジートレース理論(e.g. Johnson & Raye, 1981)が支持されており、統一した見解が得られていない。そこで本研究では、自己選択効果(self-choice effect; Perlmutter, Montly, & Kimble, 1971)が実際の記憶と虚記憶とに与える影響を検討する。自己選択効果とは、複数提示される記憶項目の候補の中から、実験参加者自身が選択した項目を記憶するほうが、あらかじめ実験者によって決定されている項目を記憶する場合に比べて記憶保持が優れる現象のことである(高橋, 1989, 1995)。実際の記憶と虚記憶とが同質であれば、リスト語と同様にルアー語も自己選択条件の方が虚再認率が増加することが予測される。それに対して、ファジートレース理論では、自己選択条件の方がルアー語の虚再認率が下がると考えられる。また、再認テストに Remember - Know 判断を追加する。Remember - Know 判断とは、再認テストで「あった」と判断された項目について、「提示される様子まで思い出せる」のか「提示されたことがわかるだけ」なのかの判断である。

方 法

実験デザイン：2(学習条件：自己選択条件・強制選択条件)×2(実際に選択したかどうか：した・しなかった)の被験者内計画であった。従属変数は、リスト語の再認率とルアー語の虚再認人数であった。また、Remember 反応率と Know 反応率についても検討した。

実験参加者：大学生 42 名であった。

材料：記憶用紙には、練習試行として5単語からなる2つの虚記憶リストを2列に配置したシートと、本試行として15単語からなる2つの虚記憶リストを2列に配置したシートを用いた。虚記憶を生成しやすい単語リストには宮地・山(2002)の日本語リスト4個を使用した。リスト各列、左右どちらに2つのリストを配置するかは、カウンターバランスした。実験参加者に覚える単語を選んでもらう自己選択条件では、1列目の単語のみいずれかの単語に丸がついており、2列以降は覚えたい単語を選ぶようになっていた。どちらのリストを覚えるかを実験者が指定する強制選択条件では、15列すべてで片方の単語に丸がついていた。再認テストには、非提示

リスト4個と提示リストの1・8・10番目の単語とルアー語が配置された。各項目に対する新旧判断と、Remember- Know 判断も配置された。

手続き：本実験は集団実験であった。まず、記憶用紙を配布し、各条件の練習試行を行った。強制選択条件では、各単語対の片一方の単語に丸がついているので丸をなぞって単語を覚えるように教示した。自己選択条件では、1列目の単語だけが丸がついているのでなぞって単語を覚えるように教示した。2列目以降は自分で覚える単語を選択し、丸をつけて覚えるように教示した。1対につき5秒間を記憶時間とし、5列について練習を行った。練習試行で課題を理解した後、本試行を行った。本試行では実験参加者は15対の単語について各条件にそって単語の学習を行った。挿入課題として5分間の計算課題を行った。その後、再認テストを実験参加者ペースで行った。「あった」と判断した項目については、Remember - Know 判断も行った。

結 果

リスト語：リスト語の再認率を表1に示した。2(学習条件)×2(実際に選択したかどうか)の分散分析を行った。その結果、学習条件の主効果が有意であった($F(1, 41) = 40.95, p < .01$)。自己選択条件の方がリスト語の再認率が高かった。また、実際に選択したかどうかの主効果が有意であった($F(1, 41) = 87.80, p < .01$)。実際に選択されたリスト語の方が再生率が高かった。学習条件と実際に選択したかどうかの交互作用も有意であった($F(1, 41) = 6.66, p < .05$)。

表1. 各条件におけるリスト語の再認率とR/K反応率

	非選択			選択		
	再認率	R	K	再認率	R	K
自己選択	0.71	0.42	0.29	0.95	0.74	0.21
強制選択	0.33	0.15	0.18	0.81	0.60	0.21
非提示	0.08	0.02	0.06			

ルアー語：ルアー語の虚再認人数を表2に示した。コクランのQ検定の結果、母比が条件間で異なることがいえなかった。

表2. 各条件におけるルアー語の虚再認人数とR/K反応人数

	非選択			選択		
	再認率	R	K	再認率	R	K
自己選択	36	20	16	33	25	8
強制選択	22	10	12	35	21	14
非提示	0.08	0.03	0.05	※非提示語のみ虚再認率		

考 察

リスト語の再認率には自己選択効果が確認されたが、ルアー語には確認されなかった。この結果だけでは積極的に各理論を支持したり棄却したりするのは難しいが、川崎・巖島・山(2012, 認知心)で、遅延時間による再生率の減少がリスト語には見られたがルアー語では見られなかった結果と合わせると、ファジートレース理論が支持されると考えられる。